

またもや福岡ハカセ登場：46億年前に地球が誕生した。10億年前に生命が誕生した、そこにはメスだけがいた。メスは誰の力も借りず自己複製した。母は自分とそっくりの美しい娘を産み、娘はまた娘を産んだ。生命は女系だけでその縦糸をまっすぐ紡いできた。いまもそのように生きる生物の例として、福岡ハカセはアリマキという小さな虫の生態を紹介する。アリマキは数ミリのドロップ状の形をした生物である。メスのアリマキは誰の助けも借りずに子どもを産む。子どもはすべてメスであり、やがて成長し、また誰の助けも借りずに娘を産む。こうしてアリマキはメスだけで世代を紡ぐ。しかも彼女たちは卵ではなく、子どもを子どもとして産む。哺乳類と同じように子どもは母の胎内で大きくなる。ただし哺乳類と違って交尾と受精を必要としない。母が持つ卵母細胞から子どもは自発的・自動的に作られる。母の胎内から出た娘はもうすでにドロップ形の身体に細い手脚を持つ、小さいながら立派なアリマキである。しかも彼女たちの胎内にはすでに子どもがいる。アリマキたちは母の胎内に娘が育つ、そして娘は、まだ産み落とされる前に、すでにその胎内に次の娘を宿している。その娘の中にもまた次の萌芽が。生物にとって、子孫を残すことのみが最重要な使命であるとすれば、この方式を採用するのが最もよい。じつは、アリマキにもオスがいる。1年に1度だけ現れる、時期は厳しい冬の訪れが近づくとき。秋も深まるとアリマキはこれまでとは違うやり方で子どもを作る。あるスイッチを入れ自分たちのプログラムの基本仕様に分岐路を作る。分岐路から基本仕様を外れて特別なカスタマイズ経路をたどったもの、ここに初めてオスのアリマキが産み出される。冬の間のみ、オスとメスが交尾することによって新たな子孫を産むのだという。しかしそこで生まれてくるのは全てメスであり、春にはまたオスは姿を消す。何のためにそんな複雑なシステムになっているのか。これは厳しい冬を乗り越えるための多様性を獲得するための方法なのだ。すなわち、メスが自分自身で再生産を繰り返すだけだと遺伝子は変化せず、多様性は生み出されない。あるメスから生まれたオスが、他のメスと交尾すれば、新たな遺伝子が生み出されることになる。種の中に多様性が生まれ、気候変動など大きな環境の変化があつたとしても、種が絶滅することがないようにしている。メスは太くて強い縦糸であり、オスは、そのメスの系譜を時々橋渡しする、細い横糸の役割を果たしているに過ぎない。ママの遺伝子を、他の娘のところへ運ぶ“使い走り”にすぎず、すべての男が行っていることはこういうことなのである。

この話を読んだ方々の書評に「生物学的には オスの存在はそうかもしれないが ヒトのオスは えらいのだ 歴史をみよ」的な考えがいくつか見られた。オレは「オスがえらい」「メスの存在があればこそ」などと考える前に「ヒトも 他の生物同様 生きること 食うこと 子孫を残すこと だけの存在であれば ヒトの生き方は 違っていただろう」と考える。ヒトは500万年前から存在した、ほんの何万年前までは、ヒトという名の生物だったが、何万年前に“火を”“言葉を”得た。その後も生物としての生き方の変化は長年そうたいして変わらなかったが、今から1万年、5千年、前ぐらいから知能が発達し、文化・文明が表れた。文化・文明というものは、子を産み子を育てる多忙なメスより、暇なオスが考えたのか造ったのか、それこそどんどん生活向上が果たされた。この文化文明はこれからどうなるのか、現代人という生物体がより便利でより快適でという名のもとに、何が発明され何が発見されるかわからない。ここでひとつの比喩を持ち出すのは危険な話だけれど、コンピューターが作られた。コンピューター自体が日進月歩の発展をとげ、まだまだ進行中だ。始めのころは夢の機械だったものが、「あの作業を あの仕事を させられたらいいなあ」という希望が少しの時間ののちには「あの作業を あの仕事を こなせるようになった」と変わっていった。「まさか 絵は 描けないだろう」「まさか 写真は 写せないだろう」と笑っていたのは何年前か。コンピューターがヒトに代わって仕事をしだした、早い、きれいな、確実、というようになって、それこそこれからは、お話や映画で想像していただけた機械なり装置なりがどんどん出てきそう。

この比喩はここまでにして、ヒトがこの地球上でどんどん増殖し、地球の表面を這いずり回り、かき回し、地球の成分を自分の使い勝手のいい成分に変えていく、これがほんとうに文化文明なのか、人類の発展なのか、不便不快な生き方はよくないのか、労働はいけないことなのか、たったの5年前、10年前はよくないのか、100年前のヒトは馬鹿なのか。かくいうオレもエラそうにはいえない、たった70年80年の寿命とはいえ、食うための食料を作ってこなかった、ただ地球を汚すがわに始終していた、健全な地球を想ってこなかった。

福岡ハカセに変わって、日高先生の話が出てくる。お二人とも専門が生物の先生。「ヒトは 食う 寝る 遊ぶかなこれ以外は いらネエ」と語呂合わせがすらすらでてきたが、「子孫を残す」ということは、ヒトを含めた生物界にとってものすごく大事なことらしい。「おまえは絶対に 子孫を 残したいか」と問われるなら「それほどでも」と答えるとおもうが、すでに二子をもっている今はその答えも空虚なり。男の方からいうのはおかしいことらしいが、男が女を選ぶのではなく、女が男を選ぶものらしい「より強い男 より美しい男 より賢い男」女はそういう男を探している。子をもっている男は、選ばれ、勝ち抜いた男なのである。

いろいろ調べ見聞きするには、何万年も何億年も前からいた生物たちは、子孫繁栄という目的で、自分の子、そのまた子、と順繰りに性殖する、生い茂る、繁栄する、ということが目的でもあったようだ。生殖というとヒトは「ちょっと スケベな気持ちになり 大きな声では 言えないが・・・」とイキイキ答える好色男、「いやねえ・・・」とはにかみながらも、うれしそうにしなつくる好色女、時間の経過で「うまくいきましたよ」「ぜんぜんだめでした」何億のヒトすべてが、違う話、違う結果、ヒトの世界の不思議な人間関係だ。身近にいる動物たちも同じようにこの問題で苦労しているのかいないのか、まさかあの昆虫が、まさかあの樹木が、まさかあのキノコが、と数々知っているだけの生物を思い浮かべるが、「彼らに 悦びは ないよね」「彼らに 快樂は ないよね」「彼らに 好きだ嫌いだ という気持ちは ないよね」いまさらながらにねんをおしてしまおうが、首もかしげる。

日高先生のアブラムシ、福岡ハカセのアリマキ、それぞれお二人は例に出している。「ところでみなさん アブラムシ アリマキ 同じモノですぞ」「油虫とも書くし 蟻牧とも書く とともに日本語なのだ」そしてまた「アリと アリマキの 共生関係」この話は当ブログ4ヶ月前の12月、河合雅雄先生の話の中に出てくるので紹介「アリとアリマキの関係では、アリはアリマキから分泌する蜜をもらい、そのお返しにアリマキを外敵から守ってやる。こうした“相利共生”は生物界でたくさん見られる。ところが植物はアリマキから樹液を吸われっぱなし、何も得ないどころか害を与えられている。一方が利益を得て他方が利益を得ないとか、害を与えられるのを“片利共生”という。またアリマキには寄生蜂の幼虫が寄生する。一般的に宿主と寄生虫は、片利共生の関係にある。」という文が載っている。

大先生連、「例として」と同じものを載せている。「これではどうも説得力が弱いネエ」ま、この話はこれでよし。

日高敏隆著<生物の性は何のためのものか>性というものの存在が、人間の心理、文化、社会にどれほど大きなインパクトを与えてきたか、とうてい計り知ることではできまい。太古から人間は、男女の性があるということを所与の条件として、ものを感じ、行動してきた。言語も文化もそのうえに成り立ってきた、近代がいかに男女の平等を唱えようと、生物学的に性の存在を否定すべくもなかった。性は人間だけに存在するものではない、ほとんどあらゆる生物にみられる。無性的な分裂によってふえるものと信じられていた細菌にも、性の存在が知られてもう久しい。これらの生物たちが人間と同じく、男と女の問題に悩まされているかどうかはわからないが、いずれにしても性の存在が、ものごとをややこしくしていることはまちがいない。自然はなぜそのようなものを発明したのだろうか？有性生殖に対置されるのは無性生殖、植物が地下茎を伸ばしてふえたり、アメーバや細菌が分裂してふえるという例がある。有性・無性生殖の根本的な違いは、子孫を生ずるにあたって、繁殖子の合一が必要であるかないかにある。<このあたりから専門分野に入り わからない部分がでてくるので 略>有性生殖が有利な点、不利な点がある。無性生殖なら遺伝子の組み換えがおこなわれないから、子孫は同じ遺伝子になる。同じ遺伝子、無性生殖ではだめなのか、自然はそれほど性に執着するのか。簡単に言えば結論は、有性生殖によって遺伝子の混合がおこり、環境に対する抵抗力が強まる。それならすべての生物は有性生殖ばかりをしていればよいはずである。有性と無性を交互におこなう生物も意外と多い。アブラムシはずっとメスしか存在せず、処女性殖でふえ続けるが、冬前にオスが生まれ有性生殖をする。植物では地下茎や根による無性生殖をおこないながら、他方で毎年花を咲かせ有性生殖をする。日高先生はスミス先生説を紹介する：性の存在 1) 性をもつ生物集団は、性をもたない集団より進化する、それゆえに長く生きのこれる。2) 性をもつ生物集団は、性をもたない集団より、多様な子孫を作る、高度に適応した子孫が生ずる機会が大きい。ただこれも予言不能な環境変化がどれくらいの時間間隔で起こるのか、それらの条件次第で変わってくる。

柳澤桂子著<われわれはなぜ死ぬのか>

この本はオレより 10 歳ぐらい年上、生物学の先生の本、扉に書いてある本の宣伝文句がすごい。私たちは、生まれ、成長したあと、老いて死んでゆくものだと思っている。けれども DNA は受精の瞬間から、死に向けて時を刻み始めている。産声を上げる 10 ヶ月前から、私たちは死に始めているのだ。生命が 36 億年の時をへて築きあげたこの巧妙な死の機構とはどのようなものだろうか。私たち生命にとって老化と死は、逃れられない運命なのだろうか。なぜ生命には死がプログラムされるようになったのだろうか。

以前「BODY FARM 死体農場」という本を読んだことがある。「この本は 何を書いた本 内容はなに」「小説の 題名」「象徴的な 題名なのか」とおもった。Body とは辞書によると身体以外に遺体という意味もあるようだ。Farm は農場、農園と、作物、家畜、魚を栽培、飼育という意味もある。でもなぜ本の題名が BODY FARM なのか、日本語翻訳の題名が死体農場なのかいまだに首をかしげている。これはアメリカでおこなわれた実験の実録、おもに犯罪捜査、研究の目的で、人間の遺体をいろいろな場所において、その時間経過の変化を観察し記録する研究だった。遺体をいろいろな場所に放置する、裸、着衣、簀巻き、少し埋めるというように条件を変える。世界中の場所、季節によって、気候、温暖、湿度が違うというようなことも考えられるだろう。鍋で遺体を煮て骨を取り出して調べるといような実験の話も載っていたようにおもう。このような様々なことが調べられている記録の本だった。「アメリカの人はドライだねえ」「ここまでして 調べるのか 記録するのか」と驚いたが、これは必要な実験かもしれないとおもった。日本にこういう研究、実験があるのかわからないが、犯罪がどんどん増える勢いの昨今、この実験は役に立ちそう。怖がり肝っ玉の小さいオレなどは、犯行現場や、新旧に関わらず置いてある遺体などを見たひには、震え上がり、むかつき、目も明けていられないようなみっともない状態になりそうだと想像が付く。いずれにしても気持ちが悪いなえ、近づきたくないなえという感想。先生の話の始まり方が、叙情的である。一般の遺体ではなく、ベトナム戦争当時「こめかみに 銃を突きつけ 今にも 引き金を引こうとする 軍人と 顔が 引きつり ゆがんだ青年」の有名な写真から始まる。

ピストルで撃たれ死んだ青年がそのまま放置されたらどうなるであろうか。青年の呼吸は停止し、心臓は弛緩したまま止まる。やがて身体の中の筋肉が弛緩する。体内にある汚物は身体の外に流れ出てくる。目はどんより開かれ、瞳孔は拡大している。遺体はなま温かく、透き通るように青白い。筋肉の弛緩は 4.5 時間続きやがて硬直する。血液の循環が停止したため、酸素が供給されなくなり、アデノシンサンリン酸が分解されて、筋肉が収縮したままになるので硬直する。24 時間後には遺体のいろいろな部分にうっ血した血液が死斑となってあらわれる。やがて遺体の硬直は消え腐敗が始まる。まず屍臭がたちはじめ、死体はふくれあがり、ウジがわく。つづいて緑色の斑点があらわれ、次第に死体全体にひろがる。腸内に生息していた細菌が繁殖して遺体を分解したためにできた斑点である。その後死体は水分を失い、皮膚は乾いて皮革のようになる。血液が循環しなくなって最初に死ぬのは神経細胞である。大脳皮質の細胞は、心臓の拍動が止まってから 7.8 分後に壊死をおこす。視床下部の神経細胞はやや長く、75 分以上生きている。引き続き、肝臓、腎臓、腺細胞が変性していく。最後まで生き残るのは皮膚の細胞で、死後 2.3 日は生きている。髪その他の毛、爪は死後もしばらくのびつづけてから崩壊する。やがて、臓器は、悪臭を発するどろどろのものになって、頭蓋、胸郭、骨盤内を満たす。肝臓は第 3 週頃に、心臓は 5.6 ヶ月めに消滅する。身体の内部にすんでいた細菌、カビ、ウイルスなどの寄生生物の餌食となった遺体は、次に外から入り込む生物によって食い荒らされる。ダニ類やムカデなどの多足類、クモ、昆虫、野ネズミなどが饗宴に加わる。化学的に見ると、身体の中の水分は、中に溶解している塩類や細菌とともに地中にしみこんでゆく。炭水化物は、アルコール、ケトン、有機酸に分解され地中に入る。その一部は炭酸ガスやメタン、水素にまで分解され大気中に放散される。ひとりの成人の死体が放散するガスの量は 5 立方メートルにもなる。脂肪は、アンモニアをたくさん含んだ低級脂肪酸に分解され悪臭を放つ。たんぱく質は鎖状の分子であるが、短く切られアミノ酸になる。その一部は、各種アミンやアンモニアになり、さらに硝酸、亜硝酸に酸化される。最後まで残るのは骨である。骨はカルシウムを失い、雨水に溶けて消滅する。骨がなくなるまでには普通 4.5 年かかるが、場所によっては数世紀もかかることがあり、歯が、数千年も残っていることもある。

◎今日は愛宕山へハイキングに出かける。阪急茨木駅、京都方面行きプラットホーム、先頭で7:30に待ち合わせをした。4人は茨木市内の方々だけれど、おひとりが吹田方面から来られるので一番便利なホーム待ち合わせになった。嵐山駅まで電車、そこで15分ぐらい待ち、清滝行きバスに乗った。電車賃:320円バス賃:230円。公衆トイレで用を済ませ、その横で靴の紐を締めなおして出発。9:30から4:30までの山行。

◎いつもは月輪寺経由の道を登るが、今日はその手前の大杉道をとった。雪が極端に少ない今年の冬、もちろんこの辺りには雪のかけらもない、4.5日前には、もう近所の桜が満開、いつもの年より20日は早いのでは。

◎先日来、くしゃみ鼻水のオンパレード「これはたまらん」ということが始まった。京都の低い山はスギの植林が多い、スギはよく手入れされている、小枝がきれいに払われ、間伐材もかたづけられている。くしゃみ鼻水の花粉症、その原因といわれるスギ花粉のフトコロに入ってしまうと案外感じない、というよりむしろ快適だ。京都は“北山杉”で象徴されるように、スギを大事にしているのかもしれない。

◎この道はおだやかな歩きやすい道。最初の1時間は軽自動車なら通れるかもしれないというような道、後半はやや山道らしくなってきた。斜面を横切りながら徐々に高度を上げていく、左下の方から川の流れる音、道はジグザグ右に左に高度を稼ぐ、スギの手入れがなくなり雑木が増えてくる。地面のしだも青々茂っている、川が近づいてきた、登っているのに流れが近づくということは、水は急斜面を流れ落ちているのだ。

◎山にはいると不思議なことがたくさんある。目の前の太い木、もう枯れて上のほうはないが、その大きさはおとな二人で手を伸ばしても届かないぐらいの太さ、少し上にこぶし大のまん丸穴、「鳥が開けたのか 獣が開けたのか コンパスを使ったように 丸く 開けるものだ」と感心。こういうところの住人はおいそれと姿を現してくれない、ものしりの人なら、「ああ あれは〇〇が開け 中の虫を食べた 今は〇〇が巣にしている」なんて簡単に説明がもらえそうだが。今日も鈴は持参しているがザックの中、熊君はもう目覚められたかな。

◎昨日の天気予報では曇りのち雨だったが、午前中の今、陽がでてい、ここは木々が繁茂している地帯なので陽の光が地面にまだ模様を描いている。今日はてっぺんに登ってもまわりの景色は見えない、曇って寒いというように想像してきたが、春の暖かい陽射しは、ありがたい予報はずれ。晴天とはいわないけれど空は多少青い。

◎そうとう上まで登った、でっかい木がある、おとな3人ぐらいかな、下の方から三俣に別れぐんぐん伸びている。幹の肌がいい、ごつごつ渋いコブ、あいかかわらず木の名前はわからない、“ミズナラ”か“カツラ”それとも違う名前か、上で開いている葉は親指ぐらいで以外と小さい、3月の今、みどりの葉っぱがあるということは冬に葉を落とさない木なのだ。

◎昨日寝る前に“方丈記”を読んでいた。その男は3メートル四方の小さい小屋に住んでいる。「どうせ私なんぞ 家族もなし 身分もそうは高くもない こんな小屋にひとりで暮らすのもいい」と僧になって山に入る。へっついさんを作り、琵琶と琴を置く。書を読み、楽器を鳴らし、山をうろつく。山とはいえ、都から歩いてすぐの山里だろうね。平安時代か鎌倉時代の話か、当時、京都市内の人口が10万人ぐらいかな、20万人ぐらいかわからないが、市内からほんの1時間も歩けば、人っ子ひとりいない山里、身分が低いとはいえ、自分で小屋を立てたわけでもあるまい、家来も皆無というわけでもあるまい、一般庶民というわけでもあるまい。そんな男のタユタユとした文章が面白い。

◎ひるめしのあとわがままをいって、1時間半もらい“竜ヶ岳”921メートルに一人でやってきた。てっぺんから1/3は林道、1/3はなだらかでおだやかな道、あとの1/3も簡単山道、天気予報どおりに曇ってはきたけれど、気持ちのいい暖かさ。このあたり、冬には1メートルぐらいの積雪があり凍てつく寒さのはずだが、今年は1ヶ月ぐらい多少積もったかもしれない。眼下に京都の街が見える、嵐山辺りの桂川、向こうのほうにロウソクと呼んでいる京都タワー、京都の目立つ建物はこれしか知らない。

◎1000メートルぐらいの京都近郊の山、下はスギの植林が多い、こういう言い方は失礼ながら尾根道は雑木林、葉が落ちた枝、緑をたたえた広葉樹、スギもあるが天然モノ、おそらく多分、永らく、なんにんもの人が行きかった踏みあと、村人、都人、盗人、侍、乞食、修験者、旅芸人、娘とそんな時代を想像するだけでも楽しい。

みなさま わざわざ足を運んでいただき 絵を見ていただき うれしいかぎりです ありがとうございます

展覧会が始まるまでに、一週間をきりました。ぼちぼち、いつも書いている“来廊御礼”の文章を書こうとおもいつつ書き出すと、どうも方向が違ってきて困っている、といいながら続けています。

もう何年か前からニュースを見ない日々を過ごしています。TVを見ない、新聞を読まないようになって久しい。わがアトリエにやってこられる方から「あのニュースを見た あれは大変だね」といわれるのを聞いて「ごめん それ 知らないけど なにがどうなったのか 詳しく教えてください」早速、皆様から話を聞く。ニュースの基本は<5W1H>と聞いたことがある。いつ (when) どこで (where) だれが (who) なにを (what) なぜ (why) どのように (how) これだけは是非とも知りたい、ひとたび聞き始めるとこれらのことを聞いてしまいたい。「どこそこで 殺人が あった」「政治家が つまらないミスをした」というようなニュース。それぞれニュース解説者のコメント、当事者の履歴、それこそニュースの主人公の“生きざま”から“癖”まで、今はメディアに流れ、あからさまにされるらしい。

若いころ、新聞は時間をかけて読んでいました、TVのニュースや座談会など熱心に見ていました。「これを知っておかなければ 話についていけない みなさまと 人間関係が保てない」というふうに生きてきましたが、「こんなものがなくても 生きていける むしろ邪魔だ」「世間の つまらないことを 知らなくてもいい」と今は逆に「TVも新聞も無視し 拒否して生きるぞ」と思うように、割り切るようになりました。

5年前の東北大震災のときも、この画廊<シャスタ倶楽部>で展覧会をしていました。大阪では「あれれ 揺れるねえ」と話す程度だったが、あの大惨事、あの津波の画像を見るのはいまだにつらい。いちど東北を、現場を、福島原発を訪ねてみたいとおもっていましたが、それはかなわなかった。海岸線、ヒトの住んでいない街、復活しつつある街、それに福島原発付近を見に行きたかった、感じたかった。

この話の続きで驚いたのが、何日かまえに滋賀の裁判所が福井で稼働中の原子力発電を「止めろ」という判決を下し、翌日には原発の運転が止った。震災以降2.3年は日本国内での原発稼働はゼロだったが、九州から、ついで近畿からと、今、日本で何基かの原発が動き出した。「せっかくあるのだからもったいない」「これを動かせば 節約できる」「日本の経済には いいことだ」「外国にも 原発を 輸出できる」ということなのか、それとも、もっとすごい野望、計算があるのか、詳しい事情は知らない。今回、裁判所は「安全性に問題あり 中止せよ」と判決を下した、その命令は翌日に施行された。この話を聞いて、「日本人の知恵はすごいね」とひとり感慨にふけた。

見回して考えると、日本は災害の多い国。「地震・雷・火事・オヤジ」という語呂合わせがあるけれど、オヤジの代わりに、水害、風害が加わるのか、海に囲まれた小さい国、長いスパンで見れば、「どこにいても いつに生きても なにがおこるか どれにであうか」神は信じていないが、困ったときの神頼み「神のみぞ知る」である。

今回の印刷物にも書いた「自身が 右へ左へ 上へ下へ 大いに揺れています 揺れながら どんぶらこ 流れています」これは今の心境です。なにもかもに通じることですが、なにごとも、なにもものも、おおらかに時空の中を流れている、それこそどっちにむいているのか、どれぐらい早いのか、それぞれの豆粒の大きさ、重さ、によって違いがあるのですが、とにかくドンブラコ、流れます、豆粒も「われが われが」といいながら、たいした差もなくやってきます。世の中も、ヒトの生きざまも、こんなものじゃないでしょうか、なにごとも、なにもものも。

5年ぐらい前に「体力がなくなってきました」なんて書いていましたが、いやはやそんなもんじゃない、低下曲線の角度にますます加速度がつき、「ゼロが目の前だ」「マイナスはありえませんが」と冗談も言えなくなる。「絵はますますおもしろい 描いているとご機嫌です」「山もおもしろい 登っているとご機嫌です」てなこと、日々を過ごしております。

展覧会前の今日、飾りつけた絵の写真を見ながら、いつもの解説文。時計回り。真ん中は暗いトイレの中、これは格好がいい。はがき大の紙にプリントし、壁にはりつけます。

◎W73xH51cm mixed materials on canvas 280116-20

絵画とは、簡単にいえば、四角い画面があり、色が塗られているだけ。それだけの世界。そんな絵に、描きては七転八倒「ああだ こうだ それだ」とのたうちまわる。この絵は、まず青色の絵の具、緑色の絵の具、黒色の絵の具、順番に筆をいれていった。全体の画面の中で、色の配置がうまくいった。筆をおいた。こんなに簡単にできあがった。

◎W122xH73cm mixed materials on canvas 041115-40

色といえば、ヒトによって、「三原色しかない 中間色がたくさんある 四色だ」といろいろいわれます。オレは赤・青・黄・緑・紫ぐらいかなと思っています。オレの絵はこの5色に白と黒がくわります。赤は好きな色ですが、赤にもいろいろあり「ちょっと赤い」「ちょっと渋い」「もっと赤い」なんて描きながらつぶやいています。

◎W91xH73cm mixed materials on canvas 211215-30

今回の展覧会、青を使った画が多い。青色の画が、たまたま多いだけ。不思議な話だが、自分の中に色のはやりがあり、青の時代、赤の時代と、その時々よく使う色が決まっています。「今は青 青がお気に入り 青の絵の具を使うと絵が成功する」「絵の具箱に 青色の絵具が 余っているだけ なのは・・・」がはは。

◎W61xH73cm mixed materials on canvas 161115-20

実はこの絵、内緒ですが、一気に描きあげた絵。白いキャンバスに、塗って、描いて、それで終わった。話は飛びますが、大昔の中国で、宇宙の話を語っていた御仁がおられます。巨大な鳥が、地球規模の距離を飛んでいく。時間も空間も超え、行きたいところへ、行きたいときに、行く。これはいいねえ、こういう考えは、「そんな ちいさいこと どうでもいい」となる。

◎W146xH73cm mixed materials on canvas 010915-40

半年前の去年の秋に、茨木市で展覧会をした時に描いた絵の、もうひとつです。

絵も壁との相性があります。壁の色、材質、額の有無、空間の大きさ、によっても違います。

ここの壁は、この絵によくあっています。絵が映えます。

◎W73xH91cm mixed materials on canvas 290116-30

絵を描いている、自分の中にある資質、これがわかってきました。絵を描きはじめて20歳前ごろには、大阪では具体美術で象徴されるような絵がさかんに描かれていました。「これは オレとは ちがう」とおもいつつ歩んできましたが、今になって「これは すごい おなじだ」とおもうようになりました。

◎W73xH73cm mixed materials on canvas 080915-20

絵の具の話。絵の具屋さんには、100色を超える色が並んでいます。わがアトリエには20色ぐらいはあるかな、でも、いつも使う色は10色ぐらいです。この絵は最初に青色のチューブを絞り、緑、黒、白と順番までわかるくらいに簡単に、しかも単純に、そして素直に、できあがりしました。こういうできあがり方は嬉しいかぎり、乾杯である。

◎W45xH53cm mixed materials on canvas 030116-10

物事がすなおに進まないという典型なのかもしれないと思いつつ、次の日もまた次の日も、と手を加え続けました。

「ええい 赤をいれてみよう」と思い切りました。なんと、うまいぐあいにできあがりしました。

◎W53xH45cm mixed materials on canvas 250116-10

自分の中にある資質、この仕事をしていけば安心できる、心の居場所がある、と思えるのが、fauvisme フォーヴィスムなのかな。ヨーロッパにもアメリカにもあった。日本画にもあった。筆が暴れすぎではよくない、とはおもいますが、自信で安心するのです。

◎W45xH53cm mixed materials on canvas 141015-10

おもしろい事を考えている。「宇宙の形とは」と問われたら手のひらに乗るカスミのような物、すぐにはじけて消えてしまう。人なんて、それこそ小さい、それこそ一瞬。ならば、オレ、どう生きる。

展覧会が終わった。欠かさずいつも来てくれる方々の一年ぶりの顔、そういえばいつも来てくれるあの人が来なかった、なにかあったのか、もうお歳なので来られなかったのか心配だ。いつも案内状は送っているがずっと来なかった人が、「二十年ぶり ぐらいですね」とあらわれた。たくさんの方がわざわざやって来てくれた。なん回も展覧会をやっていると、造り手のオレは「よし この作品を 出そう こちらも 出品しよう」というように次々作品を造らせてもらっている。観に来てくださる方々は「おお 元気 私も 元気」と一年ぶりに顔を見せていただく。「絵が変わったね」「絵が若返ったね」「今年は青い色の絵が多いね」「絵も本人も 老境に入ったね」「絵があっさり すっきりしたね」様々な絵の話。絵の話が終わると、お互いの話、昨日の話、去年の話、若いころの話、おしゃべりは続く。オレの普段の日常、アトリエにひきこもり、ヒトとあまりあわない日々、今日は誰かと話したかなという日々だけれど、展覧会のこの一週間は100人を越える方々とおしゃべり「一年分の話をしてしよう」と話し合った。

初日の一番に篆刻がやってきた。「はんこ 造って くれませんか」同級生のN子さんをお願いしたら「私は だめだけれど 友人に 素晴らしい人がいる 聞いて みたげる」「オーケーだそうよ」「絵と交換 オーケーだそうよ」という会話が流れ、わざわざN子さんを同道して持ってきていただいた。これは素晴らしい、大事にしよう、押しまろう。はんこを彫っていただいた書の赤堀先生「えききなら 中川一政がいいよ 須田剋太もいいよ 書も 篆刻も 書家でない素晴らしいさがあるよ」二人とも知っている物故画家、二人とも好きな画家 字も知っていたがあらためてネットで画像を見た、書やはんこを見た。「いい 下手だけど いい」

展覧会の真最中、なかびの今は画廊に向かう電車の中でこれを書いている。シエスタというのはヨーロッパの昼寝のことだそうで、画廊の向井先生が名付け親かな。若いころ仕事に追われながら「のんびりもいいじゃない 昼寝の習慣で ゆったりいこう」ということで命名されたのかどうか、いちど聞いてみなくては。この画廊も展覧会をし始めて10年にはならないとおもうが続けている。一番の印象に残る事件は5年前の東北大震災の日に、のんびり恒例になっている1000円パーティをやっていた。今年の1000円パーティは今までで一番多い45人ぐらい、芳名帳以外に集金箱に名前を書いてもらった、芳名帳に書かれていない名前がたくさんあった。今年も料理の買出しに行っていたのだが、なにぶん大人数の食料なので重い量が多い、来年も続けられればいいが、この買出しの見込みがつかない。

「展覧会は個展がいい 個展でなきゃ」が持論。若いころには二人展や4.5人で展覧会をやったことがあるが、うまくいけばすばらしいが、だれかが怠ける、力がはいらぬ、ということになると、緊張感がなくなりつまらない展覧会になってしまう。グループ展も、観にいくと一人だけが目立ったり、だらだら同じような作品が並んだりではつまらない。一人が4.5点、4.5人の方の力のこもった作品群がならべばそれなりに楽しい。仲良しだ、頼まれたので義理だ、忙しかったので作品が上手くできなかった、ではすまない。

自分の歳をたなにあげて恐縮な話だけれど、展覧会に来てくださる方々の年齢層が老人世代になってきた。「なんだか身のこなしが危うい」「ずっと来てくれていたのに 最近おとさたがない」「もう今年が最後かもしれん 来年はこれないかも」という会話がちらほら。絵描きの友人が「僕の仲間 生きているのは二人 あとは全滅」「平均寿命が高くなったこのご時勢に？」と思ったが、そういえばオレも、二十歳前後につきあってきた美術仲間のほとんどの方の消息を知らないながらも、自殺、不審死、病死とよく聞く。組織にくみした方の生活は衣食住が安定する、衣食住が安定すればそれに倣って、精神面も安定する。激情型の人、寡黙な人も、引っ込み思案の人も、衣食住が足りての作家生活。美術学校を出て先生になった、会社に長らく勤めたという人は比較的安定した人生を送られるが、一人でモノを造っている、2.3人の仲間とデザイン事務所を立ち上げた、という仲間たちの消息がぼちぼち途絶え、行方不明だとか、へんな死に方をしたとか耳に入る。そのでんオレはいまだに、家族にめぐまれ、仕事場であるアトリエもあり、わがままに芸術生活を続けさせていただいている、これは大いに感謝。

いつのまにか春がやってきている、安威川、土手の中、河川敷の草むら、なんだか枯れたような緑色が、すこし黄色みをおび若やいできている。ゴマ粒、コメ粒ぐらいの大きさの花だろう、黄色、紫色、ピンク色と所々に表れた。去年の秋に草刈機車がきれいに刈っていった、冬の間の3.4ヶ月は土が見えるぐらいの枯葉の混じった草むらだった。翌日には、色の粒が増え、またその翌日にも、色の粒が増え、粒も大きくなったようなきがした。ここら辺りにいちめん咲きほこる黄色いカラシナが、あちこちまばらに、ひょろり、ひざの高さぐらいまでになってきている。

大きな鳥は相変わらずいつの季節もあちこちにいると思うのだが、一番大きいグレー色と白色のサギがのんびり水辺で前の草を見つめている、オレの足音を聞いてフワリ、飛びあがる。そういえばまだ日本に残っているカモは、シベリヤに帰らないかもカモ、草の上で20.30羽が、水からあがって、草を食べていた、土の中の何かを食べていた、草の上で動き回っていたが、オレが近づくとそわそわ水のほうに移動、いっせいにホワリ、ポシャリと飛び込む。

オレが走っていると、ドボン、水の音、あれは、あの大きな音は、あれは鯉、水のなかで反転宙返り、50センチもありそうなのでつかいずうたいの半身を水から出して見せている。鯉は黒っぽい色だと思っていたが、ちゃ系のヤツもいるんだね。

先日おもしろいものを発見。鉄のでっかい橋が、いつも行く辺りに4本5本架かっている、その橋のひとつ、底のほうに座布団ぐらいの棚、そこから「ぐわ～ぐわ～」と鳴き声が聞こえる。カラスかな、まだ飛べない子が2羽そこにいた。河川敷の大きな木の上に鳥の巣を見たこともあるが、子育て中の巣を見たのははじめて。

今の画廊で毎年3月末に展覧会をするようになって7.8年が経った。それまでの若い時分は「花なんてアトリエの方がよほどきれい 百花繚乱だよ」なんてせせら笑っていたのか、花が好きな男なんてというテレだったのか、もちろんその当時以前から山に登り、川や海を歩き回っていた、けっして自然が嫌いなわけではないが、季節の空気の揺らぎ、野に咲く花、そんな叙情的なものには近づかなかった。それが還暦をこえ、体力の減少に反比例し、季節の空気の揺らぎ、野に咲く花、なんてことに心の琴線が触れだした。冬の、花のない季節が終わろうとして、まずはこの花、次はこれ、それこそ草の中からゴマ粒のような花が咲き始める。ちょっと気になるのが、こどものころに見たことがない草が2.3種類あること、これらは見たことがないが、最近やたらと目につく、名前は知らないけれど、外来種なのか、元々あったが温暖化の影響で大阪にもはびこりだしたのか。

いつも折り返し点で、体操するところがある。茨木市と摂津市の境辺り、両市の下水処理場の水が川に流れ込み、いささかにおいがする、化学薬品のおい、流れ出てくる水も自然の川の流れる水ではない。ただ考えてみれば、大量のヒトの排泄物、生活用水の排水、それらの処理水、いささかの薬を混ぜても「この数字では 人体への影響は 少ない」とマニュアル通りに理解すればそれも自然そのものだ。そこにも魚釣りの太公望がいつもなんにんか糸をたれている。もちろんここで釣れた魚は食えない、キャッチアンドリリース手法で、釣り上げたら放している。みなさんの狙いは30センチ50センチの鯉のようだが、毎日のように太公望の姿を見ているが、大きな鯉が釣れている現場は、1.2度しかないが、竿をしゃくりあげているときは男の顔つきになっておられる。

少し広い河川敷の休憩所で、ベンチにペットボトル、帽子、上着などを置きストレッチ開始。捻って、伏せて、曲げて、折って、反ってと型どおりに20分ぐらいやっている。「跳んでみれば」と画材屋の奥山さんの話から、ぴよんぴよん跳んでみるが、マサイ族のように足を曲げ跳ね上がるようなことはできない、たった10センチほど上がるだけ、若いやつのように足を曲げ跳びあがれない。身体を曲げるのもいい、足を開いて踏ん張り、両手を右へ左へ曲げると自然と声が出る、声というより唸りか悲鳴か、釣り人が何事だと振り返ってこちらを見る。

その場所に木がある、背丈ぐらいの木、水嵩が増えるたびに水に浸かり、幹の下の方には草の枯れた軸が幹より太く絡み付いている。オリーブ色を感じさせる黒い芽じゃないのかなと思わせる物体が枝の先全部に付いている。堅いがこれは何か植物の一部と冬の間は思っていた、最近になって少しずつ大きくなり、今は若草色の小さい葉っぱになっている。芽は花の子、葉の子、植物無知で下らない疑問ながら、少し季節が暖かくなると、自然といろいろなものが膨らみ春になってくる。川の中の鯉も、ザブリ、ドボリ、交尾のシーズンなのか騒がしい。今年は異常気象の暖かい日が多い冬だったのがわざわざいしたのか、いざ桜、という雰囲気がない。